



# 水都再生

## ～ 道頓堀川をさらに身近に～

道頓堀川は江戸時代初期の1612年(慶長17年)に東横堀川と西横堀川(現在は埋没している)をつなぐ堀の開削を命ぜられた安井道頓により工事が始められました。安井道頓は大坂冬の陣で討死しますが、その志は安井道<sup>どうぼく</sup>とらに引き継がれ、1615年(元和元年)に堀は完成しました。時の大坂藩主である松平忠明はその偉業を称え、以降この堀は道頓堀と称されることになりました。今年ちょうど開削400周年にあたります。



現代の道頓堀川は残念ながらクサイ、キタナイと形容されることがあります。確かに高度成長期のころの道頓堀川は劣悪でした。戎橋の下流に位置する大黒橋における1971年からのBODを図.1に示しますが、1978年頃までは10mg/Lを超える値が続いていました。BODが8mg/Lを越えると水中に溶けている酸素が消失してしまうことがあります。当時の道頓堀川にはごく限られた生き物しか棲めず、

川底からはメタンガスや硫化水素が湧き上がり、まさにクサイ、キタナイ川でした。

大阪市ではエアレーションによる酸素供給、マイクロストレーナーによる微細なゴミの除去、次ページの水門操作による清浄水導水(浄化運転)などの対策をしました。その結果水質は大きく改善され、ここ10年間、BODは3mg/Lを下回り、かなりきれいな河川並みにまで劇的に改善しました。今の道頓堀川も黒く見えますが、水がキタナイせいではなく、周りに高い建物が多く光が十分に差し込まないことと、川底が黒いためと考えられます。汲んでみると意外と透明なことに驚かされます。



安井道頓・道ト紀功碑  
(堀筋・日本橋北詰 1915年建立)

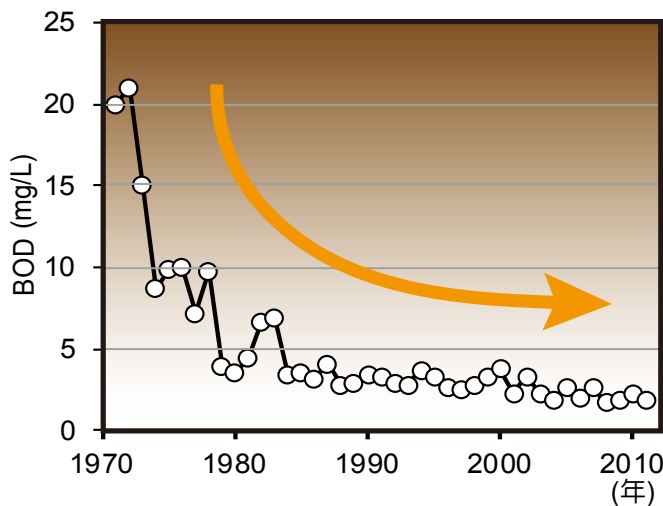
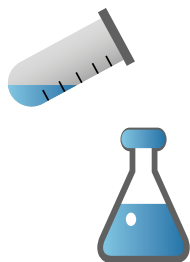


図.1 水質を示す BOD の変化

1970年代は高い状態が続いていましたが、1985年以降BODは大きく改善して水質は良くなっています。